

環境共生時代の地域づくりと地域育て

(第4回将来ビジョン検討会議資料 2010/1/13)

福井大学大学院工学研究科
原子力・エネルギー安全工学専攻
准教授 川本 義海

■ 共通テーマ「環境と共生する社会に向けての課題」

1. 環境をどのようにとらえるか

社会においては3E（「経済の発展（Economy）」「資源・エネルギー・食糧の確保（Energy）」「地球環境の保全（Environment）」）という3つの矛盾をいかに克服するかが最も重要な鍵。

これら相互のバランスを常に考えつつ、新しい時代に向けて変化を促し、新しい生活や社会、産業、技術、価値観にまで発展させることが不可欠であり、その基調は「持続可能性」。

2. 共生とは

対峙、対立といった二項対立の関係（自と他、私と公、地方と大都市、農山村と都市など）から協調、協働といった共生関係（民、NPO、里山など）を創出し、機能させるよう相互に常に働きかける動的な営みのこと。

3. 福井におけるまちづくりの中での環境変化および課題

(1) 住民参加の広まり

- 企画、計画段階からの住民参加がごく自然に、また一般的に
 - － 多自然型川づくり（福井市の狐川）、安全安心の道づくり（旧丸岡町の小中学校前の県道）ほか
- 目的意識をもった同志、有志による諸活動の活躍
 - － （特）コラボNPOふくい（2004）、（特）ふくい路面電車とまちづくりの会（2005）ほか
- 世代を超えた環境教育の活発化

- － 福井市環境パートナーシップ会議（2003）、鯖江市環境教育支援センター（2005）、美浜町エネルギー環境教育（2007）ほか
- 協働、共働（きょうどう）がキーワードに
 - － 鯖江市市民活動によるまちづくり推進条例（2003）、福井市市民協働条例（2004）ほか

（2）過疎と高齢化の全域化・常態化

- とりわけ中山間地域（農山村）集落は深刻（100集落以上がいわゆる「限界集落」）
- 国土保全機能の低下（土地の荒廃）とそれによって引き起こされるであろう副次的影響は未知数
- 都市部さらには郊外部でも過疎と高齢化は進む（県全体の高齢化率23.4%[2008]）

（3）自動車（マイカー）社会の再考と公共交通の復権

- 都道府県別の世帯あたり保有台数は依然トップ
 - － 福井1.75台（一位）、富山1.72台（二位）、群馬1.68台（三位）、全国平均1.09台 [2009.3時点]
- 移動はますます自動車依存へ
 - － 移動（トリップ）の際の交通手段（代表交通手段）別トリップ数で、自動車によるトリップが総トリップ数に占める割合は年々増加（S52では48.9%、H1では61.2%、H17では76.6%）。一方、公共交通を利用したトリップ数は大きく減少（S52では鉄道3.9%、路線バス3.5%、H1では鉄道2.3%、路線バス1.6%、H17では鉄道1.7%、路線バス0.8%）[福井都市圏パーソントリップ調査2005]
 - － 自家用乗用車の年間平均走行距離は全国平均より1割増（全国平均9,300km、福井県10,300km）
- 過度のクルマ依存からの転換をめざした「かしこいクルマの使い方」の提唱
 - － 適材適所（TPO）の交通手段選択、エコロジー&エコノミー意識の高まり、パークアンドライドの整備、モビリティ・マネジメントによる行動変容 など
 - － 「所有」から「使用」への価値観転換（カーシェアリングなど）の兆し
- 低環境負荷型のまちづくり
 - － コンパクトシティへの指向（福井市）、路面電車のLRT化（路面電車が走るのは全国で17都市）
 - － 「環境的に持続可能な交通（EST）：OECD（経済協力開発機構）が提案する新しい政策ビジョン」を背景としたさまざまな取り組み → 公共交通の利用促進（「カー・セーブデー」：参加企業・団体122、延べ参加者数約13万人[H20

年度])、低公害車の導入(次世代自動車導入推進プロジェクト)、「自転車エコ通勤」：参加総数 326 人[H20] ほか

(4) 安全安心

- 自然災害との付き合い方
 - － H16 福井豪雨の経験による治水・利水・親水のバランス(足羽川ほか)
 - － H18 豪雪の経験による中山間地区での高齢化、過疎化問題の深刻化
- 食の安全と確保
 - － 地産地消 → 小浜市食のまちづくり、池田町産マーケット「こっぼい屋」(アンテナショップ)(1999) ほか
 - － 農産物生産基盤環境の変化(全耕地面積に占める耕作放棄地の割合 2.7%で全国 44 位(全国平均 5.8%) [2005 年農林業センサス])。中山間地域は県土の約 7 割、総人口の 3 割が生活。また農業者の約 5 割が中山間地域で営農。
 - － 日本の食料自給率(カロリーベース)は 40%[2007]
- 交通安全対策の質的变化
 - － 交通事故死傷者数は減少傾向。ただ高齢者が関係する件数は増加。高齢者死亡の事故 33 件 35 人(構成率 68.8%/63.6%) [H20]
 - － 地域特性を考慮した交通安全対策 → コミュニティ・ゾーン形成事業(1996-)、安心歩行エリア(2003-2007) 12 地区、くらしのみちゾーン(2003-) ほか
 - － 安全に加え安心の要素を付加 → 子ども見守り隊、ヒヤリ・ハットマップ、安全・安心マップ(防犯・交通安全) ほか
- 廃棄物との向き合い方
 - － 産業廃棄物処分問題(敦賀市極曲)、魚あらしサイクル処理施設問題(福井市、旧武生市)、使用済み核燃料廃棄物関連施設(中間貯蔵、最終処分) ほか
 - － 資源リサイクル・リユース → バイオマス(池田町ほか)、プルサーマル(高浜町)などあらたな環境課題へ

(5) 景観・文化

- 景観を社会的価値として公的に認定(点から線、そして面へ)
 - － 景観法(2004)：日本初の景観に関する総合的な法律。福井県景観づくり基本計画(1991)

- － シーニック・バイウェイ (Scenic Byway : 景観のよい脇道、寄り道) 。シーニックバイウェイ戦略会議 (2005) → 日本風景街道戦略会議 (2006) で全国72ルートを選定
- － 里地里山の保全・活用 → 越前市白山地区のコウノトリ呼び戻す農法、勝山市小原地区の古民家再生 (2006) ほか
- － 日常生活圏域を超えた広域連携 → 越前・加賀みずといで湯の文化連邦 (1993)、ドラゴンリバー交流会 (1995)、白山文化フォーラム (2001) ほか
- － 都市と農山漁村との対流・交流 人とモノの循環 → 都市農村交流員、子ども農山漁村交流プロジェクト (総務省、文部科学省、農林水産省 2007)、集落支援員 (総務省 2008)、地域おこし協力隊 (総務省 2009) ほか

(6) 生活空間の再構築

- 土地利用の見直し
 - － 模倣的拡大から創造的縮退 (スマートシュリンキング) の土地利用に向けた見直しの必要性 → 環境再生をめざした用途地域、施設立地の見直し (不適格利用の是正) など
 - － 生物多様性 (地球サミット 1992)、生物の一種としてのヒトのための環境を取り戻すこと、また創造 → 自然再生、環境への影響緩和・補償行為 (ミティゲーション)
- 省エネルギー・環境指向の建築物、街区、地区形成による多層的な環境空間
 - － 環境共生住宅、エコタウン、風の道によるヒートアイランド現象の緩和 (都市を水環境でつなぐ)
 - － 道路空間再配分による環境改善 → トランジットモール社会実験 (2001 福井)、車道削減による歩道、自転車道の確保など

4. これからの10年（2020年頃）の環境とまちづくりを見据えた課題

- 多様な環境と環境“感”の思考・試行と醸成
 - － 環境は一つ（固定）ではない。多種多様な環境（自然、社会、経済）が共生（変動）できるまち空間の形成（環境基準づくり）への挑戦ステージへ。一見関係なさそうな小さなものも見過ごさず、つなげ活用する姿勢を。環境はそれ自身も常に変化し動いていくものと認識。 <Keyword: 環境デザイン教育>
- 自然環境は「復元」にこだわらず、「創出」も積極的に認める
 - － 自然は農山漁村だけのものではない。自然が身近なはずの地方であっても都市に田舎を、田舎に都市をつくるイメージで。地方生活者が実際持ち合わせている物的なものと心とは必ずしも一致していない可能性もある。また身近にある既存の小さな環境の種をもっと大胆に膨らませること。 <keyword: 発想の転換によるゼロからのスタート>
- 人も環境と共に育つという発想と実感
 - － 人中心の環境形成からいったん離れ、自然環境からみた人の暮らしを見つめ直し、自然に寄り添うという心を発芽させること。生かされているという実感なしに共生の実質化はあり得ない。自然との対話。 <keyword: 温故知新の体感コミュニケーション>
- トータルなエコ生活へ
 - － 部分のエコから全体のエコへ（物心のライフサイクルを考慮）。局所的な対応だけでは場当たりのとなり持続性は確保されない。 <keyword: エコライフのグローバル展開>
- 支点、力点、作用点の洞察力
 - － 環境共生社会を支える基盤（支点）、具体化させるための諸施策（力点）、環境共生社会の将来像とそのタイミング（作用点）をしっかりと見極めること。 <keyword: マニフェスト志向>
- 共生社会の見せ方
 - － 地域のありのままの環境をもっとうまく見せる（+魅せる+味せる+美せる（せる=sell=売る））
- 需要追随（量）ではなく価値創造（質）の環境理解
 - － 環境はまず「質」から問う姿勢を。